悪童物語

足立巻一
え・津高和一

21 洞門と馬

ぼくたちは「悪童」ではなかった。
しかし「善童」でもなかった。

前号まで　父は二六新報という新聞の同人であったが、ぼくの生後四カ月で急死。母は実家に帰り、祖父母に育てられる。小学一年生のとき、祖母も死に、祖父につれられて故郷長崎に引きあげたが、その祖父も急死し、孤児となる。親戚の寺や染物屋で養われていたが、急に神戸の母の実家へ引き取られ、そこから諏訪山小学校へ通うことになった。同級のトオルさんと友達になり、絵を描いたり、タルマッチをしたりして、毎日毎日遊んだ。中でも生田神社の森やおまつりは僕達の好奇心をあおりたてた。また、阪妻に魅せられて場末の映画館をまわったり、覆面遊びをしたりしたのもこの頃である。

神戸のまちを東西に長々と走る国鉄の高架線ができあがったのは、昭和六年のことである。

それまでは、線路の両側には枕木で柵をし、その内側にはキコクを植えこんであり、子どもたちが柵をこえて遊んでいた。汽車がとおると、いくつかのふみきりはいっせいに閉された。

生田筋のふみきりには、木の陸橋がかかっていた。階段になっていて、それをのぼって線路をまたぐ仕掛けである。木の橋にはすきまがあって、そこから下をのぞくと通過する汽車が見えることになる。

「橋の穴からのぞいてみい。汽車がとおるとき、えんとつの赤い火がきれいやぞ」

学校の帰りに一鶴がいった。それにちがいないと思った。

「じゃ、いまから見にゆこや」

ぼくは一鶴に提案し、かれは汽車を一列車遅らせることにし、トオルさんと三人で陸橋にのぼっていった。

「汽車はもうすぐ来る」

一鶴がいった。かれは汽車で通学していたので、時刻のこともくわしい。ぼくたちは橋のうえにすわりこんで時を待った。

ふみきりで、チンチンチンという鐘の音がし、遮断機がおろされた。すると、往来の人たちは陸橋を利用しはじめる。

「もう来るでえ」

一鶴が鋭く叫んだ。

三人は陸橋のうえに腹ばいになり、すきまに目をあてていた。

警笛がおこり、長く尾を引き、蒸進音が刻々に近づいてくる。ぼくは息を呑んでいた。たしかに、そこには真赤に燃えたえんとつの火が通過するはずであった。それは火事のようにきれいなのにちがいないと思った。

車輪のすさまじい音響が迫った。

——いまだ！

目をさらにこらした。

わ

その瞬間、ぼくはとびあがっていた。一鶴もトオルさんも何やら叫びを発してはねおきていた。

きれいな火は何も見えなかった。それどころか、涙が出るばかりで目をあけてもいられない。汽車が通過したとたん、ぼくたち三人は吹きあげる煤煙を見ひらいた目いっぱいに受けとめていたのだ。

「やい、ウソつき！」

ぼくは目をぬぐいながら一鶴に食ってかかった。

が、一鶴は何の返事もしなかった。かれも涙を流しては目をしきりにこすっていたのだ。おまけに、目のふちは煙突で黒くくまどられ、それが涙でよごれかえっている。ひときわ目が大きくて近眼のトオルさんはしゃくりあげていた。

生田筋のふみきりから西へ歩くと、トーア・ロードのふみきりとなり、そこから線路の路盤はすこしずつ高くなって三ノ宮駅の構内となる。いまのほぼ元町駅の位置で、そこはちょっとした丘になり、その下をトンネルがくぐっていて穴門と呼ばれていた。

線路は、そこから西へ向かって県庁からくだってくる道、花隈の通り、青年会館からくだる道にそれぞれふみきりがあった。その三ノ宮駅から西の浜側には古本屋がならんでいて、店さきにはたいてい『立川文庫』系統の講談本が平台のうえにならべてあった。

ところが、この鉄道線路の両側には露路が迷路のように刻まれ、そこにはちいさな家が建てこんでいた。トオルさんによれば、その家はみんなインバイ屋ということであった。ぼくがトオルさんといっしょに探険にいったところもそこであった。

夕食をすませて探険に出かけると、露路はもう暗くなっていて、どの家にも青い門灯がついていた。そして、その下には女たちが立っていた。みんなおしろいをべっとり塗り、しかもそれにかくされた頬はアバタのようにブツブツであった。

探険といっても、トオルさんのうしろについてただ歩くだけである。ぼくはこわいもののように女たちに目を向けたが、女どもはタバコの煙りを輪に吐いていたり、そしらぬ顔つきをしていた。そして、露路から露路へと

抜けた。

後年、その道の権威岸百艸に聞くと、女たちも露路によって上等、下等のちがいがあり、相手も欧米人、中華人と専門があり、ガセビリと呼ばれていたそうである。門灯が青いのはその標識で、赤だと病院とまちがえられるからだったという。また、女たちが路上に出て客を引くのは法度で、だから玄関から呼びこみ、はみ出すと検束されたという。

そのころのぼくたちは、そういうことは当然何も知らなかった。博識の少年トオルさんでも、その点はご存じなかったろう。ただ、ぼくたちの性意識がそんな暗いところからさめていったのは事実である。

そのころ、どんなはずみでか、松井さんを知るようになった。

松井さんはぼくたちより二年上級の六年で、学校は北野小学校であった。家は市電の中山手一丁目の東から斜めに布引のほうへつうじる道の左側にあった。二階建ちの店屋のあいだにはさまれ、三間だけが奥につづいているばかに細長い、ちいさな家である。学年、学校もちがい、近所というのでもないのに、なかよしになった。

ぼくとトオルさんとはよく遊びにゆき、松井さんも生田さんへやって来た。どうやら、松井さんはもう両親がなく、会社勤めの兄さんに養われているらしく、家族はそのおくさんと娘の小学生だけであった。

松井さんは背が高く、からだが大きい。だから、ケンカが強そうであった。だから、松井さんといっしょにいると気丈夫であった。顔は鼻がしゃくれているので男前ではなかったが、目はヒッジのようにやさしい。それで、ぼくとトオルさんとは松井さんを兄さんのように思ってつきあった。

松井さんはたいそう絵がうまかった。それも武者絵である。国史の教科書や歴史物語に出ているさし絵を手本にして描くのだが、ヨロイ武者や馬がじょうずだ。ぼくは松井さんによって馬の描きかたをおぼえ、いまでも馬なら結構かくことができる。

そのころの松井さんの絵が、どういうわけでか、二枚だけ手もとに残っている。一枚は北条高時が白目をむいて切腹する図で「高時自殺スル、東勝寺デ」と大きな字で説明がつけてある。もう一枚はハダカ馬が断崖をか

けおりている絵で、鴨越のさか落としなのであろう。

松井さんは、ほんとうにぼくとトオルさんとにはやさしかった。ところが、そのやさしい人は小学校を卒業すると、郷里の山口県へ帰るのだといって、ぼくたちの前から姿を消した。

ずいぶん、長い時が流れたように思う。ぼくが中学の二年になったときだと思う。突然、松井さんがぼくの家をたずねて来た。上等のユカタを着、上等の帯を巻き、銀の腕時計をはめていた。見ちがえるように肥って、すっかりおとなであった。

タンスをつくる職人になっているのだが、盆休みをもらったので久しぶりに神戸の兄さんの家に遊びに来たのだ、という。

松井さんはむかしのままにやさしく、生田さんの池のほとりで一日じゅう話をした。しかし、もうそのときには武者絵の話は出ず、タンス職人になるまでの修業のつらいことがおもに語られた。

帰りがけに、松井さんは意外なことを思いきったような口調でいった。

「おれ、カタワになってしもた…」

びっくりした。どこにもそんなようすはなかったからだ。

「見習いのときに、枝を払うためにキリの木にのぼってたんや。すると、枝が折れて落ちた。キンタマを打ったんや。死ぬほど痛かった。そいで、カタワになった…」

「なんでそれでカタワですねん?」

「なんでも、カタワなんや」

松井さんはしばらく黙ったままであった。それから、突然、声を出して笑った。

「おれのチンチン、あかんぼみたいにちいそうちぢんだまんまや…」

ぼくはそれがなぜカタワであるのかまだよくわからなかったが、その笑い声の凍りつくようにさびしかったことは鼓膜にこびりついている。

その日が、ぼくが松井さんを見た最後である。以来、消息はない。あの日から、松井さんはどのように生きたのだろうか? そして、まだこの世にいるのだろうか? 断崖を駆けくだる馬の絵を思いおこすごとに、人生のかなしさ、むごさを考えるのである。

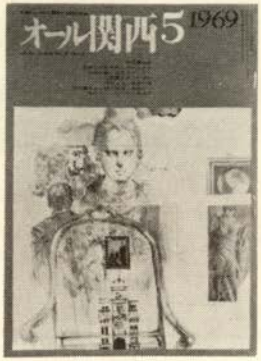
＜つづく＞

★関西の情報総合雑誌★

オール関西

6月号 190円

書店発売中



表紙／石阪春生

グラビヤ特集／現代人の24時間

小松左京，コシノヒロコ
今井祝雄，笑福亭仁鶴…

特集／海洋開発

70年の成長産業の未来を探る

好胤対話／

高田好胤——奥田良三奈良県知事

向井修二の仲間診断／

優雅なブロック音楽，延原武春とテレマンアンサンブル

小説／春木一夫の書きおろし百枚

「阪神地下有楽街」

ローマ留学記，（最終回）／新谷琇紀
コラム／経済・科学・音楽・美術
関西のすべてをガイドする

タウンカレンダー

ハイセンスの紳士服で最高のおしゃれを！

三恵洋服店

元町4丁目　TEL ㉞ 7290

よろずお襯衣縫上處

神戸シャツ

神戸店－神戸大丸前　33-2168
東京店－東急日本橋店1階　211-0511 内線219
東急渋谷本店6階　462-3433

Mr. Kent
came to Kobe
流行に左右されない
本来のオシャレ
それがKentです
シックな
スコッチ風の店舗
それがFunakiyaです

オシャレ洋品の店

フナキヤ

元町3　TEL〈33〉3617

高級紳士服専門店

神戸テーラー

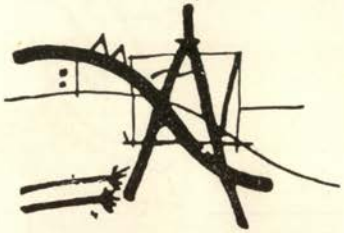
さんちかメンズタウン　TEL ㊴0388
生田区北長狭通2（阪急西口）　TEL ㉝2817・3173

シャレたセンスの舶来品が揃っています

サノヘ

元町店　元町2丁目　TEL 33－4707～8
そごう店　特選サロン サノヘコーナー

額縁絵画・洋画材料
室内工芸品



末積製額

三宮・大丸北
トア・ロード
㉝1309・6234

創作ハンドバッグ
工芸品 ORIGINAL

神戸■元町
ACCESSORIES
イクシマヤ

TEL. (33) 2415・2416

センスあふれる
べっ甲専門店
太田鼈甲店
元町1丁目　TEL㉝6195

水遊びのシーズン

カメヤのおもちゃで
たのしくあそぼう

おもちゃの

カメヤ

三宮方面でのお買物は……
さんちか店　ファミリータウン　39.4045
三宮店　センター街大洋劇場東隣　33.4969
元町方面でのお買物は……
元町店　元町通3丁目山側　33.0090
パンプウ店　元町通1丁目不二家前　39.0768

大　上　鞄　店

元町通1丁目　TEL　33・3962
さんちかメンズタウン　TEL　39・4627

羽アリを見たら

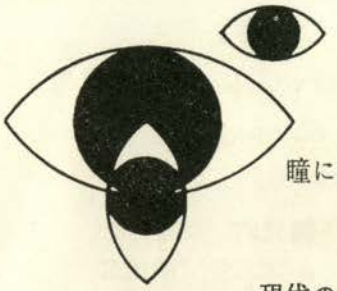
危険信号

白アリ

一回全滅　十年間責任保証
兵庫県環境衛生事業協会理事
日本白アリ対策協会認定防除施工士
神戸商工会議所会員

アイワ消毒株式会社

神戸市生田区中山手通3～52
トアロード筋
TEL　(39)8636　(33)0854



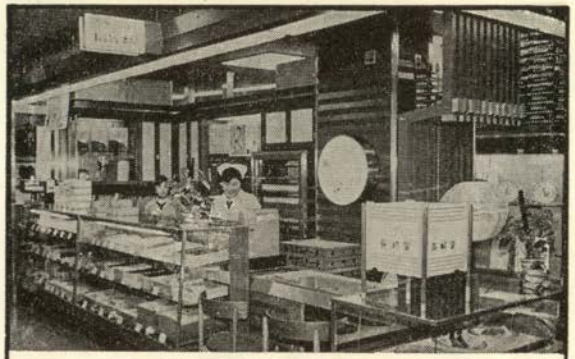
瞳に美しさを保つ
スポーツに
美容に
現代の科学が生んだ
コンタクトレンズ

日本コンタクトレンズ協会会員

国際コンタクトレンズ研究所

神戸市葺合区御幸通八丁目九ノ一（三宮駅前）
神戸国際会館内　TEL（22）8161・(23) 2570

亀の井亀井堂本家
神戸三宮トーア ロード
電話 本店 33-0001
南店 33-1616
さんちかスイーツタウン
電話 33-6532



ご贈答に風味豊かなカステーラ

長崎堂本店

本　店＝大橋町5 大五ビル (61) 0553－4
新開地店＝松竹座前 (56) 2423
元町店＝元町 6 (34) 4130
さんちかスイーツタウン (39) 3625

創業明治二十五年

履物の山下

古い老舗に新しいセンス

神戸　三宮センター街
TEL ㊴ 0256
確実正札　完全冷暖房
静かに品選びの出来る店

The Cosmopolitan
Valentine F. Morozoff

コスモポリタン
チョコレート・キャンデー

神戸本社	神戸市生田区三宮町1丁目170	電話 33－5304
神戸直売店	神戸市生田区三宮町1丁目	電話 33－1217
大阪堺筋店	大阪市東区淡路町2丁目	電話231－6979
大阪心斎橋店	大阪市南区安堂寺橋通4丁目	電話251－4182
東京銀座店	東京都中央区銀座8丁目	電話571－2303
東京新宿店	東京都新宿区角筈1丁目 新宿ステーションビル地下2階	電話352－2436
東京有楽ビル店	東京都有楽町 有楽ビル	電話213－2821
東京国際ビル店	東京都丸ノ内 国際ビル	電話212－3746

神戸っ子のみんなに愛される落ちついた喫茶店

TEA ROOM ai 喫茶 愛

★神戸・元町本通元一ビル2階　TEL (32) 0958

おすし
てんぷら
榮彌

本店　大丸前・三宮神社東
TEL (33) 5772
5674
（毎週水曜日休み）

支店　さんちか味ののれん街
TEL (39) 5233

営業時間
A.M.11.30～P.M.9.

night cap むらかみ

TEL 39-2616

神戸市生田区加納町4（阪急三宮山側但馬銀行北小路入る）

JAZZ BOX Candy

神戸市生田区加納町3丁目2
TEL 33－3371

スタンド

丘

三宮全但会館東側　TEL ㊴ 3702

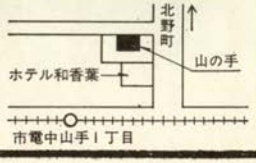
グラムール

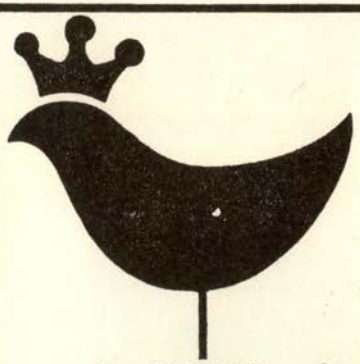
生田筋・岸ビル地階　TEL 33－4637

山の手

SNACK
YAMANOTE

神戸市生田区中山手１丁目
ソネビル ＴＥＬ 22—3637





CLUB 小万

生田新道相互タクシー上る

PHONE：　39——0638
　　39——4386

連載小説第四十回

兵庫の女

武田繁太郎
え・青木一夫

★あらすじ　まつをは十五才で広島の生家を出て鐘紡の女工になり同じ職場の安福利市と結婚。共稼ぎで苦労したすえ、呉服屋かたち屋を開いた。結婚後二十年やっと子宝に恵まれた。利市は「南栄商店連合会々長」に選ばれたが多忙な身は病を起こし、翌年三月他界した。亡夫の一周忌をすますと、まつをは大活躍をはじめるが、ふと口にした酒の味が忘れられなくなる。昭和六年の正月、高血圧で倒れた。奇蹟的に助かった彼女は半身不随になりながらも、呉服屋を閉じ、貸家業をはじめ、儲けた金を軍需工場に投資し、成功する。一方、一人息子の良治は高校を卒業すると、京都の大学の文科に進んだ。時勢はきびしい戦時体制に入り、卒業後は入隊が運命だった。せめて嫁をと母はすすめた。が母の願いを断ち、思慕する川本節子を残して入隊していった。
昭和二十年の三月神戸に空襲の噂がたったが、まつをは信じようとしなかった。しかし、数時間後、まつをは空襲の真っ只中にいた。

まつをは、はじめて知った。何百機もの大編隊による空襲が、どれほど凄まじいものであったか。日本国中の都市を根こそぎ焼き払おうという敵の焦土作戦が、どれほど徹底したものであったか。まつをは、いま、まのあたりにみせつけられていた。

御崎の上空にも襲いかかってきた敵編隊の群れが、つぎつぎと焼夷弾を投下していく。爆竹のはじけるような炸裂音が耳をろうしたかと思うと、あっというまに、屋根を貫いた焼夷弾が、天井に突きささり、ぶすぶすと不気味な音をたてながら白煙を吹きだした。天井を突きぬけた六角の筒が、畳のうえにころがりおちて、ぼッぼッと燃えだした。八帖の寝室は、またたくまに火焔につつまれた。

「お家はん。ここはあかん。逃げまほ」

おたかが金切り声をあげて、まつをの手をとった。

まつをも、さすがに顔色がなかった。

「おたかはん。こんなはずやない。こんなことて、あるもんか」

まつをは、歯がみしながら叫んでいた。

こんなはずではなかった。こんなにあっけなく敵の猛火に囲まれようとは。日本がこんなにあっさり敵機の蹂躙にゆだねられようとは。彼女には、まだ信じられぬ思いであった。不覚であった。無念でならなかった。まつをは、なにものかに腹をたてていた。血の気のうせた顔が、恐怖と怒りでひきつれていた。

だが、もう一瞬の猶予もならなかった。

「お家はん。二階はもうあぶない。階下へおりまほ」

おたかが、まつをの身体をかかえあげようとした。だが、十六貫を越えるまつをの肥満した身体は、おたかひとりの手では、どうにも扱うことは不可能であった。

「おたかはん。うしろへまわってんか。自分でなんとかおりてみる」

まつをは、おたかにうしろから身体をおさせながら、階段までにじっていった。

「お家はん。こら、あかん。おりられまへん。ちょっと！　だれぞきて」

おたかは、階下に大声でどなった。

階下には、徴用の女子工員が、女中がわりにふたり泊りこんでいた。だが、だれもかけつけてはこなかった。もうとっくに逃げだしていたのであろう。男手もなかった。

まつをは、このところ、階下より静かだというので、

ずっと二階暮しをしていた。しかし、いざというとき、身体の不自由なものが二階にいることが危険なのは、わかりきった話だった。空襲の噂は、昨夜はやくから流れていたのである。用心のために、昨夜のうちに階下へおりておくべきであった。まつをの判断は、さいごまで甘かった。こんなはずではなかった、と歯がみしみても、もう手遅れであった。

だが、まつをは、おたかほどうろたえてはいなかった。

「おたかはん。あんたも、わたしのまえにすわって、お尻をつけながらおりてんか」

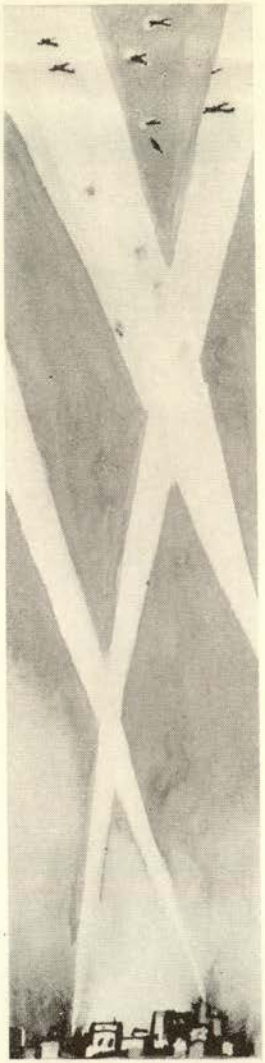
まつをは、おたかに背負われるような恰好で、自由のきく右手をしっかりと階段の手すりにからませ、一段一段、尻もちをつきながらおりていった。

だが、天井を這った火は、すでに屋敷じゅうにまわっていた。階段の下からも、もうもうと煙が舞いあがってきて、まつをもおたかも、はげしくむせびながら、必死になって階下をめざした。

ようやく、階下から内玄関まで這いでたとき、まつをの防空頭巾もきものも、火の粉をかぶって、点々と黒こげになっていた。

「おたかはん。あんたの背中にも火がついている」

まつをは、あわてておたかの背中の火の粉をたたきおとした。



御崎の通りは、もう避難民でひしめいていた。通りを北へ逃げていくもの、反対に、南へ逃げていくものと、その流れが、狭い通りの随所でぶつかりあい、完全に無秩序状態におちいっていた。

西も東も、北も南も、街はすっかり火の海にかこまれていた。焼夷弾の雨は、依然としてふりやまない。軒をつらねた商店の二階からも、真赤な火焔が吹きだしていた。避難民は、どこへ逃げていけばいいのか、わからなくなっていたのである。

だが、人間の我欲というものはあさましいものであった。この群衆でごったがえしているなかを、家財道具を山盛りにした乳母車をひいているものもあった。両手に風呂敷き包みをかかえ、大きなリックを背負っているものもいる。そのリックにも火の粉がとんで、本人が知らぬまに燃えだしていた。

「お家はん。どっちへ逃げまほ?」

内玄関から表の通りへでて、おたかは、右往左往する避難民の群れに、呆然としていった。

「八幡さんへいこう」

まつをは、とっさに、八幡神社を思い浮べた。御崎の通りを北へ四、五丁いった、運河の手前に、八幡神社があった。あの広い境内なら、火の手からものがれられるだろう。

だが、まつをのこの判断もまた、甘すぎた。ごみごみ

と人家の密集しているこの御崎界隈では、たしかに、八幡神社の境内はかなりの広さを持っているようにみえただろう。だが、その境内とて、面積はせいぜい百坪か五十坪にすぎなかった。

事実、猛火に追われた避難民たちが、この境内めがけて殺到し、そのほとんどが無残な焼死をとげてしまったが、翌朝、あたりがいちめんの焼け野原になったとき、だれもがわが目を疑わねばならなかった。人家が建てこんでいたときには広いと思われていた境内も、じつは、猫の額ほどの広さしかなかったのである。

しかし、まつをは、この八幡さんまでたどりつけば、なんとかたすかるものと思いこみ、身動きもならぬほど雑踏している通りへいざりでた。

「お家はん。がんばっておくんなはれ！」

おたかも、まつをの右手をとり、ひきずるようにして、避難民のまをぬっていった。

その頭上に、唸りをあげて、焼夷弾の群れが落下してきた。直径四、五センチほどの、六角形のエレクトロンの筒だった。それほどの重さではないが、加速度がついているので、かなりの威力があった。

「ぎやッ！」

と、いざっているまつをのすぐわきで、子供の絶叫する声があがった。十一、二才の少年だった。焼夷弾が、少年の顔にまともに当り、眉間から鼻のあたりにかけて、ささりこんでいた。顔面に血しぶきをあげ、少年は、きりきりと舞いながら、まつをのそばに倒れてきた。

「これ！しっかりしなはれ」

まつをは、その場に尻もちをつき、のたうって苦しがっている少年の身体を抱きよせた。まつをのもんぺの膝は、たちまち、血潮でべっとりと染った。

「お母ちゃん。痛い！　痛い！　目がみえへん。お母ちゃん――」

少年は、まつをの膝に頭をあずけ、両の手でむなしく空をきりつづけている。

「だれぞ。この子のお母はんは、おらんか？　お母はん！　お母はん！」

まつをは、周囲のだれかれかまわず、声をふりしぼって叫んだ。だが、こたえるものはひとりもいなかった。

背後からおしよせる人の波が、ころがっている少年を邪魔もののように踏み越え、まつをの背中や肩をけとばしながら、なだれをうっていく。おたかが、まつをの腕

をとった。
「お家はん。その子、かわいそうやけど、わたしら、逃げんとあきまへん。さあ、いきまほ」
まつをは、おたかと人波にひきずられるように、ずるずると少年のそばから離れていった。だが、まつをもまた焼夷弾の火をあびていた。いつのまにか、防空頭巾も焼けおち、お召しのきものも、もんぺも、腰にゆわえた銀行預金の通帳や家屋の権利書などをいれた書類の包みも、ぽつぽつと火を吹きながら燃えだしていた。おたかの頭髪も、じりじりと焼けちぢれていた。
「お家はん。がんばって。八幡さんまで、もうひと息でっせ」
おたかは、舟を漕ぐようにけんめいにいざりつづけているまつをはげました。だが、逃げる速度はまどろしかった。群衆は、地べたを這うようにいざっているまつをの身体を、踏みつけ、けとばしながら、つぎつぎとふたりを追いこしていく。
ちょうど御崎湯のまえあたりまできたとき、まつをの全身は、もう火達磨のように燃えさかっていた。顔は火ぶくれで脹れあがり、煙にいぶされた目は、完全にふさがってみえなかった。やけた地面を這っていた右手の指先きは、皮膚が破れ、肉まで焼けていた。
「おたかはん。おたかはん」
まつをは、呻くような声で、おたかの名を呼んだ。
「おたかはん。わたしは、もうあかん。もう動けん」
「なにをいうとってのや。そんな弱気をださんと。八幡さん、もうすぐや」
「いや。おたかはん。わたしのことは、もうかまわんと、あんたひとりで逃げて」
「そんなこと、でけまっか！　お家はんを見殺しにするなんて」
「いや。こんなことしてたら、あんたも共倒れや。良治が帰ってきたら、わたしのことを、だれが良治に話してやれるんや。さあ、おたかはん、すぐ逃げるんや」
まつをは、さいごに、女主人らしくきびしい口調でいった。
そのとき、背後から、ふたりをひきはなすように、新しい人の波がおしよせていた。御崎の街は、すでに街全体が紅蓮の炎につつまれていたが、そのまま、おたかは、まつをの姿をみうしなってしまった。＜つづく＞

★神戸の催物ごあんない★

＜音　楽＞

★ビリーボーン楽団
6月4日（水）PM6：30　曲目／「ブルーハワイ」「波路はるかに」「モスクワの夜はふけて」「真珠貝の唄」ほか
民音6月例会　会費￥850　於神戸国際会館

★吉永小百合リサイタル
6月12日（木）PM6：30　演奏／秋満義孝クィンテット
第一部／ヒット曲集　第二部／ミュージカル・バラード
「おばあちゃん」第三部／童謡・フォークソングなど
神戸労音6月例会　会費￥700　於神戸国際会館（写真）

★イングリッド・ヘブラー
6月13日（金）PM6：30　ピアノ／イングリッド・ヘブラー　演奏／大阪フィルハーモニー管絃楽団　指揮／手塚幸紀　曲目／モーツアルト作「ピアノ協奏曲20番　イ短調」
同「ピアノ協奏曲26番　イ長調」　民音6月例会
会費￥750　於神戸国際会館

★ゲバントハウス弦楽四重奏団
6月17日（火）曲目／ベートーベン作「弦楽四重奏曲・あいさつ」シューベルト作「弦楽四重奏曲・死と少女」
神戸労音6月例会
会費￥700　於神戸国際会館

★音楽映画「モーツアルトの生涯」
6月25日（水）PM6：30　OS映画劇場主催　入場料　A—￥800　B—￥600　C—￥500
於神戸国際会館

★都はるみリサイタル
6月26日（木）PM2：00　6：30　演奏／コロンビアABCオーケストラ　出演／都はるみ　井手せつ子　J・シャングリラほか　民音6月例会　会費￥550　於国際会館

＜演　劇＞

★民芸公演「炎の人」—ヴァン・ゴッホの生涯
6月3日（火）PM6：15　作／三好十郎　演出／村山知義　音楽／斎藤一郎　出演／滝沢修　清水将夫　下条正巳　内藤武敏　山内　明　高田敏江　有馬稲子　宇野重吉（声）ほか　入場料A—￥1500　B—￥1200　C—￥900　D—￥700
於神戸国際会館

★俳優座公演「自由少年」
6月5，6，7日　いずれもPM6：15　作／田中千禾夫　演出／千田是也　増見利清　出演／東野英治郎　川口敦子　滝田裕介　市原悦子　福田豊士　樋口年子　新　克利　児玉泰次ほか　神戸労演6月例会　会費￥550　於神戸国際会館

愛読者サロン

★さわやかな午前「神戸っ子」五月号が届きました。

毎号神戸の風土色がたいそう魅力的な形で表現されている秀れたご編集に感銘いたしております。酒祭りアルバムも楽しさいっぱいでございました。

＼尼崎　伊丹公子／

★先日、神戸へ行った時、初めてこの「神戸っ子」を手にしました。ずっと前に神戸をとりあつかったある雑誌で、貴社のこの本の名を目にして以来、とってもなつかしくて「どこに売っているのかしら？欲しいナ欲しいナ……」といつもいつも思っていたのですがなかなかその機会がなくそのままになっていました。でも、願いがかなって、その明るい表紙からめくる一ページ一ページに、港に吹く潮風のさわやかさを匂いながら、ますます嬉しくなってきて、これからもずっと愛読の決意を固めました。

＼京都　橋本三恵子／

★巻末布引の桜の写真拝見。

神戸を懐しな想いで一杯です。ご発展を祈ります。

＼東京　細川隆一郎／

★私は神戸にきて三カ月あまり。三年程前妹の家で読んだ「神戸っ子」は、なかなか面白く思いました。

自分の生活する事になった土地について、浅く広く知りたいと思い、異人館物語など興味のある読物でしたので、今日、一九六九年四月号を買ってみましたが、店の紹介が主で観光、史跡などの読物がなく失望しました。

＼無名氏より／

★神戸カーニバルは初めて！という友達と二人、今年も楽しいカーニバルを見物させてもらった。

今月号（5月号）の座談会「祭りの伝統を作ろう！　恋の芽生えるカーニバルに」を読み終って、あの夜を思い出してみるに、一向にそんな気配がなかったことがちょっと淋しいカンジです。

＼Y・O／

発行にいろいろとお世話いただいた方がた

嘉嘉金大小小岡岡岡牛上榎石井井石乾砂青荒有浅朝安
曽　　　　　　　　　　　　　　　　　　　比
納納井渕野根崎部崎尾田並野上植野　野木木岡田奈部
文
毅正元ツ一真　伊真吉将正成左歳信豊　重　信長　正
ト　　都　　衛
六治彦ム夫造忠子一朗雄一明門男一彦仁雄晃道平隆夫

玉田田田田滝滝竹角砂塩新白雀坂阪古後上小小小小柏
井中中村宮川川中南田路谷川部口本林藤林林泉林磯井

健寛孝虎勝清　猛重義秀　昌千　喜末英秀徳芳良健
一　之　　　　　之
操郎次介彦二一郁夫民孝雄渥介雄勝楽二一雄一夫平一

神行山若百村宮宮松福深原畑原野南中中西直外竹津
戸
青吉口杉崎上地崎井冨水　口沢部西巻脇木島馬高
年
会哉泰　辰正襄辰高芳惣泰専忠幸圭　太健準和
議　　二　　一次二　　一　之
所女弘慧雄郎二雄男美吉良郎郎郎三勝弘親郎吉助一

編集後記

★海の記念日が近づいて来た。今月は、世界の海をあちこち旅した人々に、また造船神戸の名に恥じぬこれからの船づくりにいどむ人々に集まっていただいて海特集を試みた。ぜひご一読下さい。

★神戸カーニバルには色々ご協力ありがとうございました＼小泉康夫／

★人生を深く理解しようと欲してはならない。人生はそのまま一つの祭日だとうたったリルケ。ミニキモノでサンバを踊った神戸カーニバルが終るとその感が深い。これからも無心に踊りたい。無心に生きてゆきたい。

★今月から十河巌氏のれんさい随想をバトンタッチ、林田重五郎氏にご執筆いただきました。写真も楽しめるエッセイです。

＼小泉美喜子／

★愛される故に、愛することの淋しさと、愛する故に、愛されることの淋しさと……。その二つの，淋しさ，を理解し得た時、真の愛を理解し得るであろう。わからぬままの小生の愛に於ける課題。何てこたあない、男と女の愛の違いにすぎぬだけよ。

＼川端耿一／

★紺菓子に街灯が映えて、カーニバルの熱気が残る。ほどよい疲れに映る彼女の姿に、夜店に一人佇んでいた、かつての対象を呼びおこした。

神戸カーニバルの対象が、若い世代を越えて、その本質にせまるとき街は外皮をなぐり捨てての内蔵するエネルギーで煮沸されることだろう。それはいつのことか。

＼岡本邦彦／

★日本人の平均寿命はだいたい七十才。長寿命はそれだけその人の勤労年数を長ぜしめる。後進地域で寿命とされている年令が日本では中年期にあたり、中心的なパワーになっている。長寿命はそれだけで貴重な国家資源といえる。

＼高田嘉彦／

★神戸の街を歩きまわって八カ月。ゲゲゲの鬼太郎をオニタロウと読みゲゲゲの鬼太郎を私も、パンタロンがフランス語で日本語ではズボンということぐらい分るようになりました。

＼宮本律子／

神戸っ子ごあんない

★月刊神戸っ子を毎月お読みになりたい皆さま、また神戸を離れているお友達に、神戸の香りをおとどけになりたい方は、編集室あてにお申込み下さい。さっそくお送りいたします。

6カ月分　六五〇円
1年分一三〇〇円（送料共）

◎月刊神戸っ子に紹介されている、神戸の銘店には、お客さまへのサービスとして神戸っ子がおかれています。

◎月刊神戸っ子をお買求めの時には左の本屋さんどうぞ。

コーベブックス　さんちかタウン
漢口堂三宮店　京町筋
流泉書房　センター街
文洋堂　新開会館1階
日東館　大丸前
海文堂　元町通3丁目
宝文館　元町通5丁目
甲南堂　国鉄本山駅北口
宝盛館　阪神御影南側
小原光文堂　国鉄住吉駅北口
隆司書房　新開地本通り

◎月刊神戸っ子に広告を掲載して、お店を、また商品をご紹介なさりたい方は、月刊神戸っ子編集室へお申込みください。

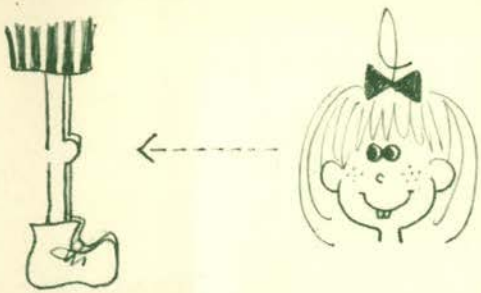
◎神戸百貨店会の事務局も月刊神戸っ子編集室内にあります。

＊発行／神戸っ子NO・98
＊編集・発行／昭和44年6月1日
＊発行所・神戸っ子編集室
神戸市葺合区八幡通5ノ96
K・Eビル4階
電話㉒7037・8072
頒価・100円

★ ★ ★

ホテルの味をお手軽に!!

そごう神戸店地下食品街オリエンタルホテルスナックコーナー



彼と彼女
パパと娘
ママと息子
そしてもちろん
あなたとグループ

何も気どらなくて
そのかわり おいろけなし
そのかわり 心のこもった……
そんなお店にしようと
スネカジリの女の子が
考えています

6月10日 オープン
どうぞのぞきにいらして下さい

DRINK & SNACK

スネカジリッ子

生田新道関西信用金庫トナリ
永晃ビル地階 TEL (39) 8708

六本木調の店が誕生しました

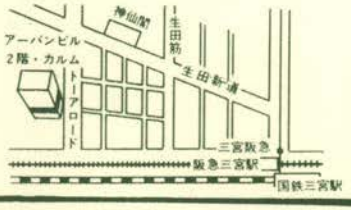
緑のイスと白いテーブル
プロピアニストによる生演奏
〈PM7：00～PM11：00〉

トア・ロードでパリのムードを!!

Grill & Supper

カルム

神戸市生田区北長狭通3丁目5番地
トアロード アーバンビル2階
TEL 39－4805 営業時間正午～AM3



白いピアノに、赤、黄のガーベラの花々が美しい季節。

コウベの夜の散策ロード生田新道の〝クラブS〟で

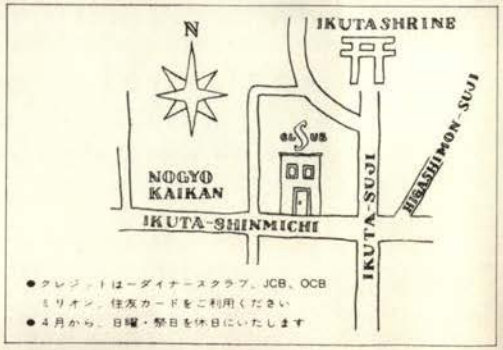
気楽なムードのひとときをおすごしください。

クラブ エス

福島里子

神戸・生田区下山手通2－6

Phone(078)33-2406



オフィスレディの悟味酒訪問〈19〉

▲さんちか店にて

冷いドリンクスにも合うわネ

鍋物ってふんわかした湯気に親しみが持てるのね　冷いドリンクスといっしょだとこれからの季節でも楽しめるわね

吉田詳子さん〈ニッケル・アンド・ライオンズ　営業課〉

さんちかタウン
悟味酒ちゃんこ場
味ののれん街〈39〉5319
AM11：30～PM9：30

鍋もの炉ばた **悟味酒**
阪急西口〈33〉3848
〈2階〉
PM5：00～AM12：30

お茶漬・おむすび・鍋もの
ふる里
生田前筋〈33〉5535
PM5：00～AM12：30

お茶漬・おむすび・鍋もの **悟味酒** ／阪急西口TEL(33)3848　PM5：00～PM12：00